途絶えた獅子舞を復活させ、引き継ぐ若者たち

長野県辰野町・羽場祭礼同志会

とまれみよ

雌雄二頭の獅子が舞う。ときには激しく、ときには静かに。太鼓や笛によるお囃子の合図で、「天」「地」「左」「右」と大見得をきり、ノミとり、居眠り、みかんの皮を放り投げる、といった所作のあと、「五穀豊穣」「家内安全」の垂れ幕を垂らす。そして、最後に聴衆一人ひとりに、頭噛みのお祓いを行なう。

正月の風物詩であった獅子舞。都会、農村を問わず最近めっきり姿を見かけなくなった。しかし、ここ長野県辰野町羽場地区では、慶事があるたびに獅子舞が登場する。新年会、祭礼の日、結婚式、新築祝い、さらには老人保健施設などからお呼びがかかり、年二〇回ほど獅子が舞う。人々の安寧と幸福を願って。舞うのは、この地区の二十代から四十代の人たちで組織される「羽場祭礼同志会」の面々。

肌寒さが感じられる十月のある日、羽場地区の祭りが、手長神社境内で開かれた。もちろん、このときにも獅子舞が登場する。しかし、羽場祭礼同志会の本領は、祭りの前夜と祭りの合い間に集落の家々を回り、舞うことにあるようだ。前夜には消防車も同行し、そのヘッドライトに獅子の舞う姿が際らし出される。闇にうつしだされる獅子の舞は、幻想的な雰囲気さえ醸しだしている。舞が終わったあとは、おむすび、豚汁、ビール、日本酒、焼酎などなど家々が思い思いに用意してくれた食べ物、飲み物を家の人たちと談笑のうち、食べかつ呑む。そして次の家へと向かう。次の家でも同様のことが繰り返される。数を重ねれば、かなり

の酒量になると思われるのだが、舞に乱れはない。

昭和六十三年、途絶えてしまった地元の青年の組織を復活させ、祭などを盛り上げていこうと、当時の若者たちが「羽場祭礼同志会」を立ち上げた。はじめ同志会では、祭りや結婚式などのお目出たい席で笠踊りや長持ち唄を披露していた。しかし、「それだけでなく、もっと羽場の地に伝わる伝統の演目を演じたい」との思いもあった。とくに、当時同志会の代表を努めていた岡田圭助さんには、以前から暖めていた構想があった。それが獅子舞。

羽場の獅子舞は、少なくとも江戸時代にさかのぼるという。文政年間、当時の高遠藩の代官が、羽場の名主からの「手長神社の鳥居改築の祝いに獅子舞を演じたい」という願いを許可する古文書が見つかっている。また、古老の話によれば、明治期、祭りのとき地元の若者が、家々をまわり獅子舞を披露していたともいう。手長神社の宝蔵倉からは、江戸時代のものと思われる表面に金箔が残る雌雄の獅子頭も残されていた。

奇しくも、手長神社では百年ぶりに造営がなされ、その落成式が執り行なわれることになっていた。「落成式で獅子舞をしよう」と、同志会の酒席で岡田さんは提案する。その呼びかけにメンバーは「獅子舞を復活させよう」と俄然盛り上がる。練習がはじまる。借りるだけで数万円もするという獅子頭の代わりにハリボテの

獅子頭を作り、練習をした。講師役は岡田さんが務めた。岡田さんは、太鼓や笛の講習に参加した経験があり、この日のため、ほかの地区の獅子舞も研究していた。それにアレンジを加え、舞を作りあげていった。落成式が行なわれた平成十四年十月二十七日が、羽場地区の獅子舞の復活の日となった。そして、前述したように獅子舞の舞台は広がっていった。同志会の活動を認めてくれた羽場区などの支援で獅子頭も次第に揃えられていく。

岡田さんは言う、「こんないなかでも、人々の付き合いは疎遠になって来ている。家々をまわるなかで、舞う若者たちにお年寄りたちが声をかけ、話し合うきっかけにもなっている」と。

今回、飛び入りで、十代の二人の若者が参加した。同志会の古くからのメンバーで代表も務めたことのある西原功さんの息子秀君とその友人の佐々木君。二人は、獅子舞の前に踊られる笠踊りに挑戦した。女性メンバーの唐沢由佳さんも、同級生の一ノ瀬さんを引っ張り出し、移動中の車中で、さかんに同志会入会のお誘いをしていた。

江戸時代からこの地でさかん舞われたという獅子舞。一度は途絶えたが、再び若者たちによって、復活し引き継がれていく。

■連絡先　三九九－〇四九三
長野県辰野町中央一　辰野町役場内　岡田圭助
TEL　〇二六六－四一－一一一一